

2023年度 第15回 信徒セミナー

テーマ：体験！神学校～じっくり学ぶ旧約聖書～

「編まれた詩編を読み解く」（レジメ2）

小林洋一

はじめに

I 詩編とは

II 詩編の種類

III 詩編の編集

IV 編集方針

おわりに

補遺：報復の祈りについて

II 詩編の種類

○詩編のヘブライ語の原題はתְהִלִּים (ティヒリム=名詞「賛美」の男性複数形)。動詞הָלַל (ハラル=誇る、強意のピエル形になると「賛美する」) の派生語。

○הָלַלְיָהּ (「ハレル-ヤ」 2人称男複の命令形、「あなたがたは主を賛美せよ」)。

הָ (ヤ) は、יְהוָה (YHWH) の短縮形。

○תְהִלָּה (ティヒラー=תְהִלִּים の女性形単数) が出てくる。協会共同訳は「讚美。ダビデの詩」と訳出。

○詩編には、神の語りかけは少なく（詩 50:5、7-15、16-23、60:8-10、68:23-24、81:7-15、89:20-38、91:14-16）、人々が喜・悲・嘆につけ、あるいは信仰の危機のなかで詠い上げた人間の言葉が主。

1. 表題による分類

○表題は編集句であって詩編の本文を必ずしも反映していない。

(1) 賛歌

○表題に、「賛歌」(מִזְמוֹר מִזְמוֹר=זָמַר ザマルの強意のピエル形=「神を讚美することにおいて音楽を奏でる」の派生語名詞) は 57 回出てくる (3:1、4:1、5:1 等)。楽器の伴奏付きで歌われたことを示す。

○楽器は、「弦楽器」(4:1、6:1、54:1、55:1、61:1、67:1、76:1 נְגִינָה ネギノート) の豎琴、琴。管楽器の「笛」(5:1 נְחִילֹת נְחִילֹת、聖書ではここだけ)、

ラッパや角笛 (詩 98:6)、タンバリン、シンバルなどが使用された (詩 150=オーケストラによる大合奏! 歴上 15:16、16:4-6 参照)。

○「指揮者」(מְנַצֵּחַ メナツツェアハ) は、詩編の表題 (詩 4、5、6 等) に 55 回出てくる。神殿礼拝での音楽指導者または聖歌隊指揮者。その詩編が指揮者の選集 (collection) に属するものであったことを示す。この言葉は、歴代誌では、神殿建築の労働者の「監督」としても出てくる (歴下 1:1、17)。

○メロディー (旋律)、「シェミニトによる」(詩 6:1、12:1、歴上 15:21)、「シガヨン」(詩 7:1)、「ギティトに合わせて」(詩 8:1、81:1、84:1)、「アラモト調」(詩 46:1) は題名が書いてあってもどのようなものか分かっていない。聖歌隊の賛美の覚え書きであった可能性が高い (歴上 16:4-6、25:6、歴下 5:13-16)。

○「セラ」(詩 3:2、9、4:3、5 等) は、歌う場合、または楽器伴奏に伴う、後で加えられた何かの指示? 「セラ」(הָלָה) の語根を「サラル」(הָלַל) に見て、「声を高める」、「演奏を強める」を考える人もいるが、本当はよくわかっていない¹。

(2) 歌

○表題に「歌」が出てくる (詩 45:1、46:1 等)。ただし、「歌」(שִׁיר シール) と「賛歌」(מִזְמוֹר מィズモール) が一緒に出てくるのも多くある (30:1、48:1、65:1 等)。よく知られたものに、「都に上る歌」(שִׁיר הַמַּעְלֹת שִׁיר シール ハツ・マアロート=上る歌) (詩 120-134) がある。この 15 個の歌のヘブライ語原文は、「上る歌」とあるだけで「都」はない。巡礼歌とも呼ばれたりする。

(3) ミクタム

○「ミクタム」(מִקְתָּם) (詩 16、56-60 編の先頭節に) は 6 回現れる。常に מִקְתָּם לְדָוִד (ミフタム レ・ダビッド=ダビデに対する (属する) のように出てくる。BDB は意味不明。HALOT は、「銘、献詩」(inscription) (イザ 38:9 מִקְתָּב מィクタヴ=「記したもの」参照)、LXX は στήλογραφία (epigram=寸鉄詩)。救いの御業を報告する奉納歌とも考える人もいる²。

(4) マスキール

○「マスキール」は 14 回現れる (詩 32:1、42:1、44:1、45:1、47:8、52:1、53:1、54:1、55:1、74:1、78:1、88:1、89:1、142:1)。ただし、詩編 47 編では、先頭節ではなく、「優れた歌」と訳されて 8 節に現れる。「マスキール」(מִשְׁכִּיל) が「サ

¹ ハバク 3:3、9、13 にも現れる。

² 勝村弘也『詩篇 詩篇注解』(日本基督教団出版局、1992)、xiii。

ハル」(חָזַן=慎重である、黙想する)の派生語と考えて、「教訓的」の意味や、「巧みな、芸術的」ととる人もいる。

(5) 祈り

○祈りの表題は5回現れる(詩17:1、86:1、90:1、102:1、142:1)。嘆きで始まるので嘆きの歌と重なる。

○詩編はモーセ五書に倣い大きく5区分(5巻)される。その第4区分(4巻)目の最初の詩編となるのが、90編。そこには「祈り。神の人モーセの詩」(תְּפִלָּה לְמֹשֶׁה אִישׁ־הָאֱלֹהִים ティフィルラー レ・モシェ イーシュエハ・エロヒーム=神の人モーセの祈り)とある。原文では、モーセの「詩」ではなく、モーセの祈りとなっている。

○詩編17編1節、86編1節の「祈り。ダビデの詩」の原題は、תְּפִלָּה לְדָוִד (ティフィルラー レ・ダヴィド=ダビデの祈り)。詩編102編1節の「苦しむ人の祈り」は原題(תְּפִלָּה לְעַנִּי ティフィルラー レ・アニー)がそのまま訳されている。

2. 内容による分類

(1) 嘆き

○出だしの1節から嘆きで始まる嘆きの詩編は、個人の嘆き(詩3、4、5、6、7、13、17、22、69等非常に多い)と、民族の嘆き(詩44、74、79等)に分類される。

○個人の嘆きの場合でも、祭儀の場で歌われるために典型的であり公的性格を備えている。嘆きに分類されても、22編のように、信頼、賛美の要素も含むものがある。

(2) 信頼の告白

○神への信頼の告白である詩編23編、他に、詩27、62、63、71、131。

(3) 悔い改め

○悔い改めの詩編としては、バト・シェバと関係したダビデの悔い改めの詩編ということで51編がよく知られている(他に詩6、32、38、102、130、143)。

(4) 王の詩編

○王の理想の支配を描くもので、終末的・メシア的に解釈されてきた(詩2、18、20、21、45、72、89、101、110、132、144)。

(5) シオンの詩編

○神の住む神殿のあるシオンを賛美するもの(詩46、48、76、87、84、122、132、137)。

(6) 即位の詩編

○ヤハウエが王であることをたたえるもの(詩47、93、96-99)。

(7) 知恵の詩編

○箴言、コヘレトの言葉、ヨブ記などの知恵文学に特徴的な形式や主題を含んでいるもの(義と悪、神への畏敬、神の驚くべき業、神の言葉と教え、教訓的等、詩1、25、33、37、49、58、73、92、94、112、119、145等)。しかし、どれを知恵の詩編とするかについては学者の間で意見が分かれる。

○知恵文学には厳密的には、祈りや嘆きは祈りの形式はとらないので(ヨブ記は例外)、詩編との融合性は高くない。にもかかわらず、知恵的要素を含む詩編含む詩篇が少ないない。

3. 様式による分類

「アルファベットによる詩」³(詩9-10、25、34、37、111、112、119、145の8編)

○技巧的。22文字が完全に出てくるものは、詩37、111、112、119で、他は欠けがある。

○知恵の詩編とも重なり、知恵の影響を受けているものもあり、教訓的な内容が多い。詩全体の暗唱を容易にする意味もあったと思われる。その他、①完結の象徴、②詩のメッセージの引き揚げ等をその効用に上げる人もいる⁴。

(1) 9-10編

○9-10編は、頭字が揃っていないだけでなく、1文字に2行を当てている。行数も詩9は22行に満たない、21行であり、詩10に至っては18行しかない。伝

³ 他に、アルファベット詩として、詩編以外では箴言31:10-31、哀1-4章、ナホム1:2-8がある。

⁴ Cf. Peter C.W. Ho, "The Macrostructural Logic of the Alphabetic Poems in the Psalter," *Vetus Testamentum* (August 2019) pdf, 2-3.

承の過程で詩文の1部が損なわれた可能性もある。

○9-10編は合体したもので、アルファベット詩が2編にまたがるのはここだけ。LXXでは合体して1編となっている。9編では、119編に似た形で、2-3節にアレフ (א) で始まる単語が5つ出てくる。

○9節では、ダレト (ד) が欠けている。詩10では、メモ (מ)、ヌン (נ)、サメク (ס)、ツァデ (צ) が欠け、全体で5文字が欠けている。

○10編7-8節ではアイン (ע) 行とペー (פ) 行の順序が入れ替わっている。哀歌2-4章でもこの現象が見られることから、嘆きの形式の特徴と考える学者もいる⁵。

○しばしばアルファベット詩で中心にくるラメド (מ) が、10:1にきている。9編では、カフ (כ) の19-21節(詩の最後)で、主への嘆願が、また10編では、シン (ש) とタヴ (ת) の16-19節で、主が王であり、その嘆願が聞かれたことが強調されていて、内容的にも両詩編の結びつきが窺える。

(2) 25編、34編

○25編、34編はヤハウエの王権(力と栄光)をモチーフにする詩編。25-34編は、繰り返し立ち現れてくるモチーフから結び合わされている、1つの塊。

○アルファベット詩が最初と最後にあって枠組みを作っている。

○両詩編はいずれも2次的付加と考えられるアルファベット詩をはみ出すペ (פ) ではじまる節が最後に来る(両詩の共通項)。

○25編にはヴァヴ (ו) がない。しかし、これは5節の頭字の接頭接続詞 (ו) が落ちた可能性が高い(LXX参照)。

○コフ (ק) もない。BHSのアパトスは18節の頭語 קִשְׁוּ (レエー=見てください) の代わりにコフ (ק) ではじまる קִשְׁוּ (ケショヴ=注目してください) または קְהָרְוּ (ケハー=取ってください) を提案している。

○34編もヴァヴ (ו) がない。その点でも25編と共通点がある。

(3) 37編

○37編も神の王権をモチーフにする詩編。37編は第1巻の最後35-41編の塊の中心を占めている。

○37編は2行からなる。ただし、アイン (ע) の行の頭文字がアイン (ע) ではない (לְעוֹלָם לְעוֹלָם) (レ・オーラム=とこしえに)。BHSはアパトスで、アイン (ע) で始まる עוֹלָם (アヴァリーム=悪人たち) を提案。その際、次の単語も「守られる」(נִשְׁמָרְוּ) ではなく、38節にも出てくる「滅ぼされる」(נִשְׁמָדְוּ) に読み替えを提案している。

○37編が9-10編と同じく1文字に2行を当てていること、また両詩編が内容

⁵ Cf. Junho Choi, "Understanding the Literary Structures of Acrostic Psalms: Analysis of Selected Poems" (Master Thesis at Stellenbosch University, 2013) pdf, 79.

的に似ていること(神義論)から、両詩編が囲い込みの機能を果たしている可能性がある。

(4) 111編と112編

○半行詩の111編は、ヤハウエの義なる行為が、そして111編に呼応する形で、同じく半行詩の112編には神の義に応える人物が取り上げられている。111編の最後の10節「主を畏れ」は、詩112の1節にも現れ、両者が「主を畏れること」というテーマで結びついている。

(5) 119編

○119編は詩編で1番長いアルファベットの技巧詩。

○1-8節の先頭の言葉は全てアレフ (א) ではじまる。次の8節(9-16節)はベト (ב) と、そして次の8節(17-24節)ギンメル (ג) とヘブライ文字22文字のすべてが8節ずつ先頭の言葉に現れる(頭韻法)。8節になっているのは、讃えられている律法が、「律法」(תּוֹרָה トーラー)を含めて「定め」(עֲוֹת エドト)、「諭し」(פְּקוּדִים ピクーディーム)、「掟」(מִצְוֹת ミツヴォト)、「戒め」(מִשְׁפָּטִים ミシュパティーム)、「言葉」(דְּבָרִים ダバル)、「仰せ」(אִמְרָה イムラー)の8語の言葉で言い換えられているから。

○111-118編の讃美のセクションを締めくくる形で、特にアルファベット詩編112編1節「ハレルヤ。幸いな者、主を畏れ/その戒めを大いに喜ぶ人。」を受けるような形で、119編では、神の教えを喜ぶトーラー(人生のガイダンス)に忠実な人物が取り上げられている。

○よく引用される聖句。

¹⁰⁵あなたの言葉は私の足の灯/私の道の光。

○日本バプテスト連盟発行の『新生賛美歌』131番「イエスのみことばは」はこの聖句に触発された讃美歌の1つ。

¹³⁰あなたの言葉が開かれると光が射し/無知な者にも悟りを与えます。

は、105節に関連するよい言葉。「無知な者」(פְּתוּיִים ペタイーム=未熟な者、単純な者)は、「悟り」(מְבִינִין メビーン)と共に箴言によく出てくる知恵的言葉)。

⁷¹苦しみに遭ったのは私には良いことでした。あなたの掟を学ぶためでした。

○神との関係で苦しみを見ている。人が忌み嫌う、憎むべき相手であると思われるような「老・病・死」が、自分を神に近づけた、と理解するのに似ている。

詩編119編の真ん中の節は、

⁸⁸あなたの慈しみ (רַחֲמֶיךָ הֵסֵד) にふさわしく/私を生かしてください/あなたの口から出る定めを守れるように。

○詩編119編は神の教え（トーラー）を称える詩だが、神の教えにふさわしくではなく、神の慈しみにふさわしく生きれるようにと願っている点で、この詩編の中央に位置するにふさわしい。すなわち、慈しみに生かされてこそ、神の言葉を守ることもできていくと考えられるから。

○トーラーがあまりにも理想化、神聖化され、神と同一視され、神のように詠われているのが気にかかる。

⁴⁸私はあなたの戒めを愛し/それに向かって両手を上げ/あなたの掟に思いを巡らします。

○律法を愛するが故に、「それに向かって両手を上げ」とは、律法に向かって祈ることを意味する。

(6) 145編

○詩145には、ハレルヤはないが、ハレルヤの囲い込みのある詩146-150の導入点に位置している。

○13節と14節の間にヌン (נ) の行が欠けている。しかし、LXXやシリア訳にはヌン (נ) の行がある。クムラン第11洞窟で発見された詩編の巻物 (11Q Ps^a) にもヌン (נ) の行がある。勝村弘也はその復元したものを次のように訳している。「ヤーウェは、そのすべてのことばにおいて真実で、そのすべての働きにおいて誠実です。」勝村は、17節「主は、その歩まれるすべての道に正しく/あらゆる御業において慈しみ深い。」との近似性を鑑みて、2次的な加筆の可能性を指摘しつつも、元来あったものが脱落したのか、それとも付加かの判断を

保留している⁶。

○145編8-9節はヨナ書を思い起こす（主の自己信条）。

⁸主は恵みに満ち、憐れみ深く怒るに遅く、慈しみに富む方。

⁹主はすべてのものに恵み深くその憐れみは造られたものすべての上に及ぶ。

○145編の中央、11-13節のカフ（כ）、ラメド（ל）、メム（מ）行では神の王権が中心的に強調されている。これを逆にすると、מֶלֶךְ（メレク＝王）となる⁷。

中央（カフ、ラメド、メム）

¹¹彼らはあなたの王権に満ちる栄光を述べ/あなたの力強さについて語ります/

כבוד

¹²人の子らに力強い御業と/王権の輝かしい栄光を知らせるために。

להודיע

¹³あなたの王権はとこしえの王権/あなたの統治は代々に。

מלכותך

○「王権」（מְלֻכּוּת マルクート＝御国）は、旧約では最も遅い時期に使用されたので、この成立年代はギリシア時代と考えられている⁸。

○ピーター C.W. ホーは、アルファベット詩前半の4編＝9-10編、25編、34編、37編（第一巻）は、地上のダビデの王権とシオンを代表すべきイメージを形作り、後半の4編＝111編、112編、119編、145編（第5巻）は、理想のダビデ共同体のあり方を特徴づけていると指摘している⁹。ダビデ王朝の崩壊を前提とする詩編が含まれる前半と後半に挟まれた部分（第二、三、四巻）にはアルファベット詩編は現れない。

Ⅲ 詩編の編集

1. 韻律と並行法

○詩編は詩なので、リズム、韻律が重要。韻（2+2、3+2、3+3、4+4のような韻律の数え方については議論がある）を踏でおり、並行法（parallelism）をもちい

⁶ 勝村弘也『詩篇 詩篇注解』、157。

⁷ Cf. Peter C.W. Ho, “The Macrostructural Logic of the Alphabetic Poems in the Psalter,” 13.

⁸ 勝村弘也『詩篇 詩篇注解』、157 参照。

⁹ Cf. Ho, “The Macrostructural Logic,” 29.

ている。

(1) 同義的並行法 (詩 1:1-2、51:4)

(詩 1:1-2)

¹ 幸いな者/悪しき者の謀に歩まず/ (2+ 2 +2)

אֲשֶׁר־יִהְיֶה־אִישׁ אֲשֶׁר לֹא הִלָּךְ בְּעֵצַת רְשָׁעִים

罪人の道に立たず/ 嘲る者の座に着かない人 (4+4)

וּבְדֶרֶךְ חַטָּאִים לֹא עָמַד וּבְמוֹשָׁב לְצִים לֹא יָשָׁב :

² 主の教えを喜びとし/ その教えを昼も夜も唱える人。 (4?+4)

כִּי אִם בְּתוֹרַת יְהוָה חִפְצוֹ וּבְתוֹרָתוֹ יִהְיֶה יוֹמָם וּלְיָלָה :

(2) 対照的/対立的並行法 (詩 1:6、20:8)

(詩 1:6)

⁶ 主は正しき者の道を知っておられる。悪しき者の道は滅びる。 (4+3)

(3) 統合的並行法 (詩 3:5) — 1 行目を 2 行目が発展させるという手法。詩編 3 章 5 節では、神への自らの祈りに神からの応答をえたことの確信が詠われる。

(詩 3:5)

⁵ 主に向かって声を上げれば/聖なる山から答えてくださる。 [セラ

קוֹלִי אֶל־יְהוָה אֶקְרָא וַיַּעֲנֵנִי מִתּוֹר קְדָשׁוֹ סֶלָה : (3+3)

○詩 3:5 には交差法 (キアスムス) も見られる。

a (私の声) + b (主に向かって) + c (私は呼ばわる)

c (彼は私に答える) + b (山から) + a (彼の聖)

(4) 作者

○表題に、ダビデ、コラの子、アサフ、ソロモン (詩 72)、モーセ (詩 90) があつたとしても、それは必ずしも作者名を示さない。「歴史的著名人に属する」くらの意味。厳密に言って作者は不明。

○「ダビデの詩」が多い。これはダビデの作というよりも、「ダビデの詩編集に属する」くらいの意味。ヘブライ語はדָּוִד (レ・ダヴィド)、「ダビデに属する、ダビデのために、ダビデに関して」という意味で、「詩」という言葉は原文にはない。

○詩編の作成には、神殿に仕える祭司、レビ人が書記として、あるいは宮廷に仕える（祭司系の）書記も詩編の作成に関係していたと考えられる¹⁰。

○詩編の書き留めには、書記が大きな働きをした。書記になるためには、長い間の訓練が必要。前2世紀のシラ書38章24節（ギリシア語で書かれている）に

24 律法学者（γραμματέως）の知恵は、暇に恵まれてこそ生まれ/ 実務に煩わされない人が知恵ある者となる。

○律法学者とは書記（scribe）のこと。書記は、ベン・シラの時代でも経済的余裕があつて書記になる訓練に就かせることができた家系、祭司の家系からの出身者が多かつた。ベン・シラも祭司の家系。エズラも祭司の家系であり、書記でもあつた。

（エズ7:6）

⁶このエズラが、バビロンから帰還した。彼はイスラエルの神、主が授けられたモーセの律法に精通した書記官（סֹפֵר ソフェル）であり、その神、主の手が彼の上にあつたので、王は彼が求めるものすべてを与えていた。

○書記は当時の知識人。「書記」（סֹפֵר ソフェル）は男性名詞。詩編はすべて男性の作か¹¹。

¹⁰ 箴25:1「…ユダの王ヒゼキヤの下にある人々が筆写したもの。」とあり、箴言（の一部）の編集にユダの王ヒゼキヤ（治世728-700）に仕える人々が関わったことが記されている。「人々」（אֲנָשִׁים アンシェー＝男たち）とは書記のことであろう。書記は王国時代、政府の高官でもあつた（王上4:3, 王下22:9, エレ36:10）。歴上2:55はユダの子孫に「書記の氏族」（専門職のギルド）の存在を示唆している。Cf. Shaye J.D. Cohen, *From the Maccabees to the Mishnah* (Philadelphia: The Westminster Press, 1989), 119.

¹¹ 月本昭男は、例えば、詩56:9に出てくる涙の皮袋と、創21:14-21に出てくるハガルの「革袋」に繋げて、56編が元来女性の作であつた可能性を示唆する。月本昭男『詩篇の思想と信仰Ⅲ 第51篇から第75篇まで』（新教出版社、2011）、81。131編もその可能性があるかもしれない。月本昭男『詩篇の思想と信仰Ⅵ 第126篇から第150篇まで』（新教出版社、2018）、82参照。113編がハンナの祈り（サム上2:1-10）がもとになっていると考

(5) 編集者・編纂者

○祭司系、特にレビ人や下級祭司の人々で、詩編に「忠実な人」(חֲסִידִים ハシード「慈しみ」[חֶסֶד へセド]の派生語)として言及されている人々か。彼らは捕囚期以後の宗教伝承の執筆、編集、筆写、保存作業において重要な役割を果たした人々と考えられている¹²。

○「忠実な人」(חֲסִידִים ハシード)は、聖書中 34 回のうち 25 回詩編に現れる(多くは複数形、詩 4:4、12:2、16:10、18:26、30:5、31:24、32:6、37:28、43:1、50:5、52:11、79:2、85:9、86:2、89:20、97:10、116:15、132:9、16、145:10、17、148:14、149:1、5、9)。

○ハシードは、ヤハウエの「慈しみ」(חֶסֶד へセド)に信頼して生きる人(詩 52:10-11)。このへセドは神の契約に対する忠実という意味もあり、出エジプト記 34 章 6-7 節の神の自己信条にも出てくる重要な言葉。

(詩 52:10-11)

¹⁰ 私は神の家に生い茂るオリーブの木のように/ 代々とこしえに神の慈しみ (חֶסֶד へセド)に信頼します。¹¹ 私は、あなたの計らいのゆえに/とこしえに、あなたに感謝します。私は忠実な人たち (חֲסִידִים ハシード、複数形)を前に/ 恵み深いあなたの名に望みを置きます。

○ハシードは 50 編 5 節では、神と「契約を結んだ人たち」と言い換えられている。また、132 編 9 節では「祭司たち」と並行関係にある(詩 149:1 参照)。

○伝統的には、ハシードは「敬虔な人」をも意味。現代においてハシードと言えば、バアル・シェム・トーブ (1700-1760 頃)によって創始された神秘主義的傾向をもつユダヤ教の刷新運動を担う敬虔派の人々を指す。この運動と思想は、ハシディズムと呼ばれ、「我と汝」で有名なユダヤ教の宗教哲学者マルチン・ブーバー (Martin Buber, 1878-1965) に影響を与えた¹³。

○このハシードは、政治的、社会的、宗教的な意味での上層階層とは対立する立場にあり、しばしば貧しき者、困窮者として、自らを言い表す(詩 12、18、37、86、132 参照)。石川立は、彼らのことを神 (ヤハウエ) との特別な交わりを目指す自称「貧者」の集まりであり、『詩編』編集を一手段として状況に対抗すると共に、真のイスラエルのアイデンティティーを求め、これを形成していこうと

えるならば、間接的ながら女性の作に数えることが可能かもしれない。

¹² 魯恩碩『旧約文書の成立背景を問う 共存を求めるユダヤ共同体 (増補改訂版)』(日本キリスト教団出版局、2019)、308-309 参照。

¹³ マルチン・ブーバー (平石善司訳)『ハシディズム』(教文館、1997) 参照。

した」人々であったと分析¹⁴。魯恩碩^{ロウソク}は、彼らが自らの境遇を経済的弱者の状況に重ね合わせていた「神学的な知恵文学に関心を持ち、豊かな神学教育を受けた人々であった」と推測¹⁵。

○詩編に非常に多く貧者について言及がある（リスト1）。9編、10編、37編は「貧者の詩編」として知られている。

○ハシードと貧者と関連を示す詩編の章句。

(詩 18:26-27)

²⁶あなたは忠実な者 (חֲסִידָה ハシード) には忠実な方として/ 全き者には全き方として現れる。²⁷清らかな者には清らかな/ 心のゆがんだ者には曲がった態度をとる。²⁸あなたは苦しむ (אֲנִי אֲנִי アニー) 民を救い高ぶる目を低くする。

(詩 86:1-2)

¹祈り。ダビデの詩。主よ、私に耳を傾け、答えてください。

私は苦しむ者 (אֲנִי אֲנִי アニー)、貧しい者 (אֲבִיּוֹן エヴヨーン) です。²私の魂を守ってください。私は忠実な者 (חֲסִידָה ハシード) です。あなたの僕を/ あなたに信頼する僕を救ってください。あなたこそわが神。

(詩 132:15-16)

¹⁵この食糧を豊かに祝福し/貧しい人々 (אֲבִיּוֹן エヴヨーン 複数形) には飽きるほどのパンを与える。

¹⁶祭司たちには救いの衣をまとわせる。忠実な人々 (חֲסִידָה 複数形) は声高らかに喜び歌う。

(リスト1)

「貧しい人」(אֲבִיּוֹן エヴヨーン) -詩9:19、12:6、35:10、37:14、40:18、49:3、69:34、70:6、72:4、72:12、72:13、74:21、82:4、86:1、107:41、109:16、109:22、109:31、112:9、113:7、132:15、140:13)

「苦しむ人≠貧者」(אֲנִי אֲנִי アニー) -詩9:13、9:14、9:19、10:2、10:9、10:12、12:6、14:6、18:28、22:25、25:16、25:18、31:8、34:7、35:10、37:14、40:18、44:25、68:11、69:30、70:6、72:2、72:4、72:12、74:19、74:21、

¹⁴ 石川立「第六章 詩編の様式と編集」『現代聖書講座第2巻 聖書学の方法と諸問題』(日本基督教団出版局、1996)、155-156。

¹⁵ 魯恩碩『旧約文書の成立背景を問う』、313、331-332。

82:3、 86:1、 88:10、 88:16、 102:1、 107:10、 107:41、 109:16、 109:22、
119:50、 119:92、 119:153、 140:13)

「弱い人≡貧者」(𐤅𐤁𐤃 ダル) -詩41:2、 72:13、 82:3¹⁶、 82:4、 113:7

(6) 表題のダビデについての但し書き

○貧者との関係で、栄光のダビデではなく、危機のなかにある低き(貧しき)ダビデが取り上げられている(詩編とサムエル記および列王記との間テキスト性)。(リスト2)

(リスト2)

- ① **3:1** 賛歌。ダビデの詩。ダビデが息子アブシャロムから逃げたときに。(サム下 15 章)
- ② **7:1** シガヨン。ダビデの詩。彼がベニヤミン人クシュの言葉に対して主に歌ったもの。(「ベニヤミン人クシュ」とはベニヤミン族の「キシユ」(サム上 9:1)の変形と捉えることもできる。M. テートは、「クシュ」をサムエル記下 18 章のダビデに息子アブサロムの死の報告をもたらした「クシュ人」と捉え、詩編 3 編の表題がアブサロムの反乱を示し、詩編 7 編の表題がアブサロムの死による反乱の収束を示唆しているとして、詩編 3 編-7 編の表題による囲い込みをみようとしている¹⁷。
- ③ **18:1** 指揮者によって。主の僕ダビデの詩。主がダビデをすべての敵の手、またサウルの手から助け出した日、彼はこの歌の言葉を主に語った。(サム下 22 章)
- ④ **34:1** ダビデの詩。ダビデがアヒメレクの前で気がふれたように装い、追われて去ったとき。(サム上 21:13-15)¹⁸
- ⑤ **51:1** 指揮者によって。賛歌。ダビデの詩。

¹⁶ 「乏しい人」と訳される(𐤅𐤁𐤃 ラシュ)は箴言では頻出するが、詩編ではこの1回のみ。

¹⁷ Marvine E. Tate, "An Exposition of Psalm 8" Perspectives in Religious Studies 28: (2001), p. 347. Kevin Gary Smith, "The Redactional Criteria and Objectives Underlying the Arrangement of Psalms 3-8," (A dissertation of Doctor of Theology at the South African Theological Seminary, 2007) pdf, 150-151は、聖書には、この出来事は出てこないのに、聖書外の記録による可能性が高く(歴上29:29参照)、ダビデの支配下にあってもサウルに忠誠を尽くすベニヤミン人クシュの偽りの中傷の可能性を考えており(サム下 16:5-13、 20:1-3参照)、学者の間でも見方が分かれる。

¹⁸ 当該章句では、祭司「アヒメレク」ではなく、ガトの王「アキシユ」となっている。飯謙『旧約詩編の文献学的研究』、154 は、祭司「アヒメレク」言及は編集者の不注意ではなく、ダビデが聖所(神殿)からの距離をとっていたこと(神殿批判)の示唆をみる。

- 51:2 ダビデがバト・シェバと通じたことで、預言者ナタンがダビデのもとに来たとき。(サム下 12 章)
- ⑥ 52:1 指揮者によって。マスキール。ダビデの詩。
52:2 エドム人ドエグがサウルのもとに来て、「ダビデがアヒメレクの家に来た」と告げたとき。(サム上 22:9 以下)
- ⑦ 54:1 指揮者によって。弦楽器で。マスキール。ダビデの詩。
54:2 ジフ人が来て、サウルに「ダビデが私たちのもとに隠れていないか」と言ったとき。(サム上 23:19)
- ⑧ 56:1 指揮者によって。「はるかな沈黙の鳩」に合わせて。ダビデの詩。ミクタム。ペリシテ人がダビデをガトで捕らえたとき。(サム上 21:12 以下)
- ⑨ 57:1 指揮者によって。「滅ぼさないでください」に合わせて。ダビデの詩。ミクタム。ダビデがサウルを逃れて洞穴にいたとき。(サム上 24:4 以下)
- ⑩ 59:1 指揮者によって。「滅ぼさないでください」に合わせて。ダビデの詩。ミクタム。サウルがダビデを殺そうと、人を遣わして家を見張らせたとき。(サム上 19:11)
- ⑪ 60:1 指揮者によって。「百合」に合わせて。定め。ミクタム。ダビデの詩。教えのため。
- ⑫ 60:2 ダビデがアラム・ナハラיםおよびツォバのアラムと戦い、ヨアブが帰って来て塩の谷で一万二千人のエドム人を討ち取ったとき。(サム下 8 章)
(この表題は、ダビデの戦いの勝利への言及となっている。苦闘〔敗北〕の後に神の助けがあることを示すためか。ただし、サム下 8:13-14 では、塩の谷の戦いをヨアブの勝利にしていない。人数も 1 万 8 千人と違う)
- ⑬ 63:1 賛歌。ダビデの詩。ダビデがユダの荒れ野にいたとき。(サム上 24:1 以下)
- ⑭ 142:1 マスキール。ダビデの詩。ダビデが洞穴にいたとき。祈り。(サム上 22:1)

IV 編集方針

1. 神の教え、避けどころなる神

○1 編は主なる神の教え（トーラー）を讃える（詩 1:2）知恵モード（様態）の詩編（詩 25、33、37 等参照）。

○箴言の格言に頻出する知者が好む「正しい者」（צַדִּיקִים ツァデーク）と「悪しき者」（רְשָׁעִים レシャイーム רָשָׁע ラシャの複数形）が対照的に出てくる。

（箴 10:30）

³⁰ 正しき者 (צַדִּיקִים ツァデーク) はとこしえに揺らぐことはないが/悪しき者 (רְשָׁעִים レシャイーム רָשָׁע ラシャの複数形) は地に住むことはできない。

○1編は、אֲשֶׁרִי (アシュレー、名詞・複数・連語形=幸いなこと！=強い承認・肯定の宣言¹⁹) で始まり、תֵּאֲבֹד (トヴェド=滅びる) で終わる。ヘブライ語アルファベットの最初の文字א (アが最初来る単語が3連続。אֲשֶׁרִי־הָאִישׁ־אֲשֶׁר) と、先頭と最後の文字תが先頭にくる単語を用いることで、正しい者と悪しき者人生の全てを表わす²⁰。

○「正しい者」と「悪しき者」(罪人) と対立的に2者の描写は、現実的ではない。現実は、人を白、黒と明白にわけられるものではなく、人は皆灰色の存在である。ここで「正しい者」というのは、罪のない、落ち度のない人という意味ではなく、神のトラーを喜び、神に忠実である者、神に結びつけられた人生を歩んでいる者。「悪しき者」とは、神との交わりをもととせず、神から離れている者。この区別はあくまでも神学的。

○詩編は、読者に正しい者を選びとって欲しいと願い、知恵文学において一般的な原因と結果の論理を援用して、2項対立的にその運命を予測可能的に強調する。

○1編では、正しい者が幸いな者であるということで、1節の悪しき者のように「歩まず」「立たず」「着かない」と、まずは3つの否定が出てくる。連続的な否定辞(לֹא ロー =not) は十戒の連続的否定辞(ただし、否定辞+2人称・男・単・未完了形)を連想させる。また「歩む」「道」「道」は最後の節6節にも2回は人生の旅路の比喩であり、また3節の流れのほとりに目的をもって移植された木は正しい者の成長と発展を暗示させる比喩。

○2編は、王政と聖なるシオンの山(6節)に焦点をもつ王の即位詩編。知恵的詩編と即位詩編という性質の異なる1編と2編が、אֲשֶׁרִי の囲い込み(inclusio)によって結び合わされている。両者にאֲשֶׁרִי という同じ言葉が出てくる²¹。このאֲשֶׁרִי は、1編では先頭の言葉だが、2編では、最後節である12節に現れる。

¹⁹ 勝村弘也『詩篇 詩篇注解』(日本基督教団出版局、1992)、150 参照。マタ 5:3-10 の祝福文の文頭に出てくる μακάριοι (「幸いなるかな!」)(形容詞・男・複)に相当。

²⁰ 祭司が人々の間の裁定に用いるウリム(אֲוִרִים)とトンミム(תְּמִימִים)は、頭文字のアレフ(א)とタヴ(ת)が書いてあるサイコロであったかもしれない(出 28:30、申 33:8 等)。長谷川修一『旧約聖書〈戦い〉の書』(慶応義塾大学出版会、2020)、109 参照。

²¹ アシュレーは、詩 1:1 と 2:12 に呼応するように第1巻を締めくくる詩 40:5 と 41:2 にも現れる。これにより、אֲשֶׁרִי (アシュレー) は、第1巻そのものを囲い込む言葉となっていることがわかる。Cf. Weber, "Psalm 1 and Its Function," 250-251.

(詩 1:1)

¹ 幸いな者 (אֲשֶׁר־יִשְׂרָאֵל) / 悪しき者の謀に歩まず / 罪人の道に立たず / 嘲る者の座に着かない人。

(詩 2:12)

¹² 子に口づけせよ。さもなければ、主の怒りがたちまち燃え上がり / あなたがたは道を失うだろう。 幸いな (אֲשֶׁר־יִשְׂרָאֵל) 者、すべて主のもとに逃れる人は。

○1編と2編は全く異なるモード(様態)の詩編だが、一体としてとらえられることが期待されている。

○אֲשֶׁר־יִשְׂרָאֵל は、旧約聖書では43回、そのうち詩編に26回出てくる。詩編全体を赤い糸のように貫いている(1:1、2:12、32:1、2、33:12、34:9、40:5、41:2、65:5、84:5、13、89:16、94:12、106:3、112:1、119:1、127:5、128:1、137:8、144:15、146:5)。

○神の名、ヤハウエ(יהוה)のヘブライ文字は数字も表す。י=10、ה=5、ו=6、ה=5、合計26となる(ゲマトリア)²²。

○1編の主の教え(トラー)にコミットする、すなわち、「主の教え(トラー)を喜びとし/その教え(トラー)を昼も夜も唱える人」²³(詩 1:2)には、信仰の決断が含まれる。しかし、神への信仰は、それだけでは充分とは言えない。信仰は、1編のなかでの神の教えを学ぶ以上の強い基盤が必要である。それは世界の支配者なる主なる神との人格的交わりである。そのような基盤は2編によって提供される。すなわち、2編12節「幸いな者、すべて主のもとに逃れる人は」とあるように、主を避けどころとすることが必要である。終末的神の裁きを信じて、神が最終的に自分を守ってくれると信じて神と交わることである。「幸いな」には2つが必要。「主の教えを喜ぶこと」と「主のもとに逃れる」こと²⁴。

「逃れる」、「避ける」(הִסָּתֵר ハサー)は、詩編に23回出てくる。逃れる先としては無実の罪人を保護する神殿や聖所(出 21:13 参照)がイメージされていた(詩 11:1、4、18:1、7、46:1、5、61:5、118:8、26 がそれを連想させる)²⁵。し

²² Cf. Casper J. Labuschagne, “Compositional Structure of the Psalter: A New Approach.” *Psalterstructure* (internet, rev08/12/08), 10.

²³ 主の教え(トラー)は、モーセ五書というよりは、その教えをも含む神が与えた啓示としての人生のガイダンス(教え)の総称であろう。Cf. Peter C. Craigie and Marvin E. Tate, *Psalms 1-50 Second Edition* (Word Biblical Commentary; Zondervan: Thomas Nelson, Inc., 2004), 60.

²⁴ マーヴィン・E・テート(拙訳)「聖書解釈の一仕様としての間テクスト性(Intertextuality)」『西南学院大学神学論集——神学部移転記念号』第58巻第1・2号合併号(2001.3)、99-101参照。

²⁵ 月本昭男『詩篇の思想と信仰I』、31参照。

かし、2編12節での「主のもとに逃れる」は、主を信頼し、主を寄る辺として生きることを意味すると考えられる²⁶。

○どうして2編の後に3編なのか。2編が王の即位と支配を詠っているので、王の支配との関連でも読めるが、1編との関係では、王を含めて、正しい人の道には「苦難」があるという警告となる。そして1編と3編を連動して読むと、3編の理不尽な苦しみは、1編で語られていた「正しき者」にふりかかる理不尽な苦しみのことになる。3編の2編との関連では、理不尽な苦難のなかにある人は「主のもとに逃れる」（詩2:12）ことで幸いを得る人となる²⁷。

2. 2編と油注がれた者（メシア）

○2編は王の即位詩編で、地の諸国民と支配者が主なる神とその油注がれた者（メシア）に対して反抗の蜂起をすることの描写をもって始まる。しかし、主なる神は、天の玉座に座し、彼らのそのような努力を笑う。主なる神は、神の「子」と呼ばれるシオンに座す油注がれた王（メシア）に大いなる権力を約束し、終わりに、この世界の支配者たちは、主なる神の「子」に臣下の礼を尽くしつつ、恐れとおののきをもって、賢く、主なる神に仕えるように諭される。ここにあるのは、闘うメシア像である²⁸。

○新約聖書と初期キリスト教は、この詩編を終末に到来するメシア預言として読んだ（詩2:7=使徒13:33）。

（使徒13:33）

³³つまり、神はイエスを復活させて、私たち子孫のためにその約束を果たしてくださいましたのです。それは詩編第二編にも、『あなたは私の子/私は今日、あなたを生んだ』と書いてあるとおりです。

○2編が詩編全体の最初の方にあるということは、詩編全体がメシアを期待する終末論的仕方で読まれるべきことを示唆する²⁹。

○1編における神の教えにコミットして生活することは、終末におけるメシア待望と共に、世界の支配者の挑戦を、天から嘲笑する主なる神の終末論的権能に錨を降ろしていることを意味する。ここでいう終末論的とは、神の支配を否定し、

²⁶ Ibid.

²⁷ Cf. J. Clinton McCann, "The Book of Psalms," in *the New Interpreter's Bible Volume IV* (Nashville: Abingdon Press, 1996), 693.

²⁸ Cf. Labuschagne, "Compositional Structure of the Psalter, 8.

²⁹ 詩89:39-46ではダビデ王朝はすでに滅びたことが明示されている。

裏切るように見える状況のただなかにあつて神の支配を信じることを意味する³⁰。3編の苦難のなかにある祈り手もまた終わりの時のメシアと神の業を期待する者である³¹。

3. 詩編全体の表題

○1編と2編には3編以下にあるような表題がない。表題の使用には自由があり、ある場合には表題が欠けている。表題が欠けているのは、ある場合には故意に「一組に」取り扱うことを示しているように見える。その例として詩編9編と10編、32編と33編、42編と43編、70編と71編、103編と104編がある。

○103編と104編の場合には、両詩編とも最初と最後が「私の魂よ、主をたたえよ。」(בְּרַכְיִי נַפְשִׁי אֱת־יְהוָה) バラヒー ナフシー エト-アドナイ)で囲い込みがなされている。

○詩編135編と136編の場合には、120編-134編の15の「都に上る歌」の終章を形成している。135編は、「賛美」であり、最初と最後に「ハレルヤ」があるハレルヤ詩編。一方136編は、「感謝」の交唱歌、応答歌で「ハレルヤ」はない。異なる文学的特徴にも関わらず、内容的には救済史(135:8-12と136:10-22)において結びついている。

○135編と136編は、その「賛美せよ」(135:1)と「感謝せよ」(136:1-3)において「都に上る歌」を締めくくるにふさわしい詩編である。「神々の中の神」(136:2)と「主の中の主」(136:3)という神に対する強調表現は、ここ以外では、申命記10章17節にしか出てこない独特のもの。

○ユダヤ教の伝統において、136編は、過越祭を閉じる前の最後の賛美で、「大ハレルヤ」と呼ばれる。

○1編と2編に表題がない。それは、この2つの詩編そのものが150編全体の表題になっているからであろう。

³⁰ Cf. McCann, "The Book of Psalms," 663.

³¹ ノベルト・ローフィンク「詩編とキリスト教—詩編を理解するための最終編集の意義—」『神学ダイジェスト』85(1998冬)、86参照。

参考文献 (ABC 順)

- マルチン・ブーバー (平石善司訳) 『ハシディズム』 (教文館、1997)
- 石川立 「第六章 詩編の様式と編集」 『現代聖書講座第2巻 聖書学の方法と諸問題』 日本基督教団出版局、1996, pp.140-163.
- 長谷川修一 『旧約聖書〈戦い〉の書』 慶応義塾大学出版会、2020.
- 勝村弘也 『詩篇 詩篇注解』 日本基督教団出版局、1992.
- ノベルト・ローフリンク 「詩編とキリスト教—詩編を理解するための最終編集の意義—」 『神学ダイジェスト』 85 (1998 冬) 77-88.
- 魯恩碩 『旧約文書の成立背景を問う 共存を求めるユダヤ共同体 (増補改訂版)』 日本キリスト教団出版局、2019.
- マーヴィン・E・テート (拙訳) 「聖書解釈の一仕様としての間テクスト性 (Intertextuality)」 『西南学院大学神学論集—干隈移転記念号—』 第58巻第1・2号合併号 (2000.3) .
- 月本昭男 『詩編の思想と信仰Ⅰ—第1篇から25編まで—』 新教出版社、2003.
- 月本昭男 『詩編の思想と信仰Ⅲ—第51篇から75編まで—』 新教出版社、2011.
- 月本昭男 『詩編の思想と信仰Ⅵ—第126篇から150篇まで—』 新教出版社、2018.
- 月本昭男 『詩編の思想と信仰Ⅴ—第101篇から125篇まで—』 新教出版社、2020.
- Choi, Junho. “Understanding the Literary Structures of Acrostic Psalms: Analysis of Selected Poems” (Master Thesis at Stellenbosch University, 2013) pdf., 1-98.
- Cohen, Shaye J.D. *From the Maccabees to the Mishnah*. Philadelphia: The Westminster Press, 1989.
- Craigie, Peter C. and Marvin E. Tate, *Psalms 1-50 Second Edition*. World Biblical Commentary 19; Grand Rapids, Michigan: Zondervan, 2004.
- Ho, Peter C.W. “The Macrostructural Logic of the Alphabetic Poems in the Psalter,” *Vetus Testamentum* (August 2019) pdf, pp.1-23.
- Labuschagne, Casper J. “Compositional Structure of the Psalter: A New Approach.” *Psalterstructure* (internet, rev08/12/2008), 1-28.
- McCann, J. Clinton. " The Book of Psalms," in *the New Interpreter's Bible Volume IV*. Nashville: Abingdon Press, 1996, 641-1280.
- Smith, Kevin Gary. “The Redactional Criteria and Objectives Underlying the Arrangement of Psalms 3-8.” (A dissertation of Doctor of Theology at the South African Theological Seminary, 2007) pdf. 1-368.
- Tate, Marvine E. “An Exposition of Psalm 8” *Perspectives in Religious Studies* 28: (2001), 343-359.